

日本台湾学会第8回学術大会記念講演

2006年6月3日  
於 一橋大学国立東キャンパス

## 戦後台湾における台湾研究について —台湾史研究を中心として—

張 勝彦  
(翻訳 張 士陽)

前言

- 第1節 各大学歴史学の台湾史課程
  - 第2節 戦後各大学の歴史専攻課程大学院の台湾史課程
  - 第3節 1982年以前台湾史研究概況——修士論文を例として
  - 第4節 最近二十年來の台湾史研究の概況
- 結語

### 前言

台湾は19世紀中葉の開港前後から、政治・経済・社会・文化・教育が次第に変化した。黄色人種である漢人主流の社会となったのはこの150年ほどで、とりわけこの100年間の社会変化は中国とはっきり異なっている。今日の台湾は各方面で既に先進国に匹敵し、今日の成功にはいかなる理由があるかについて、一般の注目を大いに集め、台湾研究への思いを引きつけた。これにより学者らは人類学・社会学・政治学・経済学・法学・歴史学や総合的学科などの学術分野から台湾研究に着手し、「台湾研究」は国際学術界から注目されるようになった。私は今日第二次大戦後（以下戦後と略称）、台湾における台湾史研究の状況についてのみ概略を報告し、各位よりご教示を賜りたい。第二次世界大戦後今にいたる60年、この半世紀あまりの歳月のなか、台湾人は自己の歴史を重視したか、関心の焦点はどこか、またその間どのような変化があったかについてである。

台湾史研究は戦後、台湾在地の学者がその研究に従事した。楊雪萍・陳奇祿・方豪・曹永和・賴永祥・黃得時・陳紹馨は台湾史研究という領域において傑出した研究成果を挙げた学者である。しかし戦後の60年間に、台湾の歴史研究者が台湾史研究に多大の苦心と労力を投入して、多くの研究成果をあげたことも、認識すべきことである。

台湾戦後60年間の台湾における研究史上の状況を理解しようとするならば、その方法はとても多いが、今回は各大学の歴史学科・大学院の課程内容の変化と、各大学の歴史学専修課程大学院の修士・博士論文中の台湾史研究の篇数と研究テーマの変化とから理解してみたい。

### 第1節 各大学歴史学の台湾史課程

台湾の各大学の「歴史学系（歴史学科）」と「歴史研究所（歴史学専修課程大学院）」とは台湾

における歴史研究者養成の主要な組織である。台湾の戦後 60 年間に、国立の台湾大学・台湾師範大学・政治大学・中興大学・成功大学・清華大学・中央大学・中正大学・暨南大学・東華大学・台北大学、私立の東海大学・文化大学・輔仁大学・淡江大学・東呉大学と、16 大学が歴史学科、歴史学専修課程大学院、「台湾史研究所 (台湾史研究専修課程大学院)」を設置した。(表 1 参照)

表 1：台湾各大学歴史学系、歴史研究所、台湾史研究所設立概況

校別	系所 年別	歴史学系	歴史研究所		台湾史研究所 碩士班
			碩士班	博士班	
台湾大学		1928	1947	1967	--
台湾師大		1946	1970	1977	2004
政治大学		1967	1976	1987	2004
中興大学		1968	1991	1997	--
成功大学		1969	1985	1997	--
清華大学		--	1985	1996	
中央大学		--	1993	--	
中正大学		1993	1991	1994	
暨南大学		1999	1996	--	
東華大学		1999	--	--	
台北大学		2000	--	--	
東海大学		1955	1970	--	
文化大学		1963	1962	1967	
輔仁大学		1963	1967	--	
淡江大学		1966	1998	--	
東呉大学		1972	1999	--	

出典：呉文星「近五十年來關於日治時期之歴史研究與人才培育 (1945-2000) ——以歴史研究所為中心」、『台湾史研究』第 8 卷第 1 期、2001 年 6 月、163-164 頁。

上述の大学の歴史学科や大学院で、その開講された課程科目の名称と必修選択の規定について見れば、台湾では戦後 40 年あまりの間、各大学の歴史学科の課程内容は、一貫して中国史・西洋史 (世界史) が主で、その中で中国断代史と西洋王朝史に重点がおかれた。歴史学関係の大学院の課程内容は、輔仁大学が西洋史に重点を置いている外は、1980 年代以前に設立された台湾大学、文化大学と東海大学などの歴史系の課程はすべて中国史に重点を置き、台湾師大・政治大学の両校は中国近現代史に重点を置いた。この外に 1970 年代以前は、台湾の各大学院では中国通史が必修科目とされ、1970 年代には中国現代史が大学の必修科目に加えられ、中国近代史は専科学校の必修科目となった<sup>1</sup>。以上のように 1950 年代以降の台湾における歴史研究とは、基本的に中国史研究であり、西洋 (あるいは世界) 史研究は研究紹介と教育の段階に留まり、台湾史は中国史の単なる一部分だった<sup>2</sup>。

戦後 40 年あまりの台湾における政治・経済・社会の変化により、1980 年代以後、台湾における歴史研究は中国史研究によって独占されていた局面を次第に突破した。筆者と呉文星教授および鄭梓教授による台湾大学・台湾師大・政治大学・輔仁大学・東呉大学・淡江大学、文化大学・中央大学・清華大学・中興大学・東海大学・中正大学・成功大学の 13 大学の歴史学関係の学部

と大学院での、1992年度から1996年度までの「台湾史」に関する課程開設状況の調査研究によって得られた知見によれば、以下のようにまとめられる。

- 一、近年各歴史関係の学部・大学院系は次第に「台湾史」課程を開設しているが、普及の段階に達していない。一部の歴史関係の学部・大学院では「台湾史」関係の課程を開設しておらず、また一部の歴史関係の学部・大学院では隔年で開講あるいはその他の歴史学課程の中で台湾史を開講しているのに過ぎない。
- 二、全国の各歴史関係学部では、おおむね通論・断代・専史・專題等の型態で、大部分は二・三・四年生の選択科目として開講している。その中で淡江大学歴史系では1991年度から周宗賢によって6単位の「台湾通史」が開講され、3年生の必修科目となっている。また師大歴史系では1995年度から呉文星によって6単位の「台湾通史」が開講され、2年生の必修科目となっている（師大王啟宗教授は1974年度から台湾史選修課程を開講していた）。
- 三、各歴史系の大学院では、大部分は專題・専史的研究（semi-nar）と討論（coiiioquia）の混合形態である。ただ中正大学の大学院は1991年度から、黄俊傑によって開講された「戦後台湾史專題研究」（6単位）、「戦後台湾史資料選読」（0単位）があり必修科目となっている。但し各大学院の台湾関係の「台湾史」課程では、概ね修士課程の選択科目である。
- 四、全国の各歴史関係学部と大学院を概観すると、近年開設された「台湾史」課程には、研究入門と概論的科目（台湾史・台湾通史・台湾発展史等）、断代史的科目（清代台湾史・台湾近代史・台湾現代史・戦後台湾史等）があり、さらに専史や專題の科目（台湾経済史・台湾海洋史・清代台湾農墾史・台湾民間宗教史・台湾仏教史・明清台閩仏教史・台湾社会と文化・台湾的文学と社会思潮・植民地と戦争・中日関係史・台湾民族史等）がある。その中で東海大学では1995年度から、やや特別な授業方式をとっており、「台湾史」を「1895年以前」、「日抛時期」及び「1945年以後」の三段階に分け、3人の教授によって同時に開講し（すべて通年4単位）、2年生から4年生の歴史系の学生の選択科目としている。
- 五、まとめて論ずれば、1997年7月までで、全国の各歴史関係の学部・大学院の「台湾史」関係の課程は、歴史関係の学部・大学院の専攻課程全体の中で占める割合は大変小さく、その位置も明確でなく、同時にまた完成された「学程（研究コース）」ではなかった。それで、早急に多数の人々の考えを集め有益な意見を吸収し、基礎から専門研究課程に進級し、「層級」・「進階」を有機的に組み合わせて「台湾史学程（研究課程）」をどのように設計構成するかを検討する必要があった<sup>3</sup>。

1990年代後半から、台湾の各大学の歴史学課程には大きな変革がおこった。その特色は台湾史という領域が「系統的学程（研究課程）」となり、台湾通史は歴史学課程の必修科目となり、選択科目として台湾政治史・台湾経済史・台湾社会史・台湾文化史等の専門科目、および先史時期・オランダ統治時期・鄭氏統治時期・清朝統治時期・日本統治時期・現代台湾史の科目が開設されたことである<sup>4</sup>。

## 第2節 戦後各大学の歴史専攻課程大学院の台湾史課程

戦後の1980年代からようやく台湾大学、台湾師範大学両大学で大学院に台湾史研究科目が開講され、担当者は黄富三と李国祁であった。その後各校で次々と台湾史関係の専門研究カリキュラムが開設された<sup>5)</sup>。

現在全台湾の14ヶ所の大学の歴史関係の大学院の中で、台湾史の専門研究カリキュラムが開講されていないのは東呉大学と東海大学だけである。台湾史のカリキュラムのある大学院の開講科目は多様化し、その中で中央大学・成功大学・淡江大学の歴史系大学院は台湾史研究者養成を重点することを掲げており、開設された台湾史科目は5～10科目にのぼっている。台湾大学・台湾師大・政治大学・清華大学の4校は、台湾史は歴史学科の一領域ではあるけれども、4～5科目が開講されている。しかし中国文化大学と輔仁大学とは台湾史関係の科目を1科目だけ開講しているだけである(表2参照)。

表2：台湾各大学歴史学専修大学院台湾史課程開設状況(2001年6月)

校別	項次	姓名	職階	学歴	専攻	教育科目
台大	1	許雪姬	教授	台湾大学博士	台湾史・台湾家族史	清代台湾史專題研究
	2	黄富三	教授	英・ケンブリッジ大学 学碩士	台湾史	清代台湾社会經濟史
	3	吳密察	副教授	東京大学博士課程	台湾史・日本近代史	淡新檔案研究・日抛時期台湾史
師大	4	吳文星	教授	台湾師大博士	日治時期台湾史・ 近代中日關係史	台湾近代史研究・台湾近代史專題研究
	5	温振華	教授	台湾師大博士	清代台湾史	台湾農墾史研究・台湾区域史研究・ 台湾社会史研究
政大	6	許雪姬	教授	台湾大学博士	台湾史・台湾家族史	台湾史史料與史学・台湾史專題研究
	7	吳文星	教授	台湾師大博士	日治時期台湾史・ 近代中日關係史	日治時期台湾史專題研究
	8	廖風德	副教授	政治大学博士	台湾史・中国現代史	台湾史区域研究
政大	9	呂紹理	副教授	政治大学博士	台湾史・城市史・ 中国近代社会史	近代台湾社会史專題討論
中興	10	黄秀政	教授	台湾師大博士	台湾史	台湾史研究
成大	11	梁華璜	教授	東京大学課程博士	近代中日關係史・ 日抛時代台湾史	日抛時代台湾史
	12	石萬壽	教授	台湾大学碩士	隋唐史・台湾史	田野採訪專題研究
	13	林瑞明	教授	台湾大学碩士	台湾文学史・ 中国近現代文学史	台湾近現代文学史
	14	鄭梓	教授	東海大学碩士	台湾現代史・ 中国現代史	戦後台湾政治發展史專題研究
	15	陳梅卿	副教授	立教大学博士	台湾宗教史・ 日本文化史	台湾基督教会史
清大	16	張炎憲	教授	東京大学博士	台湾近代社会史	台湾社会文化史專題討論
	17	陳華	教授	台湾大学博士	中国近現代史・ 台湾近現代史	

	傅大為	教授	アメリカ・コロンビア大学博士	科学史與科学哲学・台湾当代文化史・台湾近代医学史	台湾戦後医療與身体史專題
	康 豹	教授	アメリカ・プリンストン大学博士	中国宗教社会史・中国道教史	台湾宗教社会史
	周婉窈	副教授	アメリカ・イェール大学博士	日治時期台湾史	台湾史專題討論
中 央	張勝彦	教授	京都大学博士	台湾近代社会史	清代台湾史研究・台湾政治社会史研究
	呉文星	教授	台湾師大博士	日治時期台湾史・近代中日關係史	日治時期台湾史專題研究
	張炎憲	教授	東京大学博士	台湾近代社会史	台湾近代史研究
中 央	康 豹	教授	アメリカ・プリンストン大学博士	中国宗教社会史・中国道教史	台湾宗教社会史
	戴寶村	副教授	台湾師大博士	台湾海洋史・近代台湾史	台湾海洋史研究・近代台湾史
	朱德蘭	副教授	九州大学博士	近代中日關係史	日本統治殖民地史研究
中 正	顏尚文	副教授	台湾師大博士	台湾仏教史・魏晉南北朝史	台湾民間宗教史專題
	李若文	副教授	東京大学博士	清代社会史	日据時期台湾史專題研究
	林榮祿	副教授	香港新亜研究所博士	明清經濟史	台湾經濟史論著選読
暨 大	鍾淑敏	助理教授	東京大学博士	日治時期台湾史	日治時期台湾史專題研究
	林偉盛	助理教授	台湾大学博士	台湾史・近代中蘭貿易史	早期台湾史專題
文 化	陳鵬仁	教授	東京大学博士	中日關係史	詳読矢内原忠雄著帝国主義下の台湾
輔 大	尹章義	教授	台湾大学碩士	明史・台湾開發史	台湾涉外關係史專題
淡 江	周宗賢	副教授	文化大学碩士	台湾史・古蹟維護的理論與実践	台湾開發史專題研究・台湾史蹟研究
	蔡錦堂	副教授	筑波大学博士	台湾近代史・日本史	台湾近史日文史料導読・台湾近代史專題
	林呈蓉	副教授	御茶ノ水女子大学博士	中日關係史・日本対外關係史・日治時期台湾史	台湾史料分析・台湾対外關係史
	鄭志明	教授	台湾師大博士	台湾民間信仰史	台湾宗教史專題研究・台湾民間教派史專題
	張素玠	助理教授	政治大学博士	台湾史・原住民史	台湾近代社会變遷史研究・台湾文化史專題研究

出典：表1と同じ。

### 第3節 1982年以前台湾史研究概況——修士論文を例として

戦後台湾の1947年に歴史関係の大学院が設立されたが、1966年になってようやく中国文化大学の王珂の「中法戦争在台湾（台湾における清仏戦争）、江樹生の「清領以前台湾之中国移民」の2篇が台湾史を研究テーマとする修士論文として提出された。1970年代以後、台湾史研究の論文が続々と提出された<sup>6</sup>。戦後1992年の時点で台湾の各大学歴史関係大学院で修士論文は487篇、その中で台湾史研究の論文は僅かに27篇、5.54%を占めただけで<sup>7</sup>、台湾史関係の修士論文は平均して毎年1篇（0.73篇）に足らなかったが、ただ1973年から、1977年を除いて毎年1篇あ

るいは1篇以上の台湾史に関する論文が提出された。1973年と1974年は各1篇、1975年2篇、1976年と1978年は各3篇、1979年は4篇、1980年5篇、1981年と1982年は各2篇である<sup>8</sup>。このことからわかるように、1973年から台湾史研究の論文数は次第に増加する傾向にあった。

表3：1982年以前台湾各大学歴史学専修大学院台湾史修士論文一覧表

年度別	校別	論文作者	論文題目
1945-1965	-----	-----	-----
1966	文化大学	王珂	中法戦争在台湾
	文化大学	江樹生	清領以前台湾之中国移民
1967	台湾大学	黄富三	劉銘伝清賦事業與土地改革研究
1971	台湾大学	張勝彦	台湾建省之研究
1973	文化大学	樊信源	清代台湾民間械闘歴史之研究
1974	台湾大学	張炎憲	清代台湾政策之研究
1975	台湾大学	陳秋坤	十八世紀上半葉台湾地区的開發
	文化大学	黄之台	近三十年來台湾茶葉産銷之研究
1976	台湾大学	林滿紅	茶糖樟腦業與晚清台湾之經濟社会
	文化大学	吳水吉	從乙未台湾抗日運動看台湾民族運動之性質
	文化大学	蔡相輝	台湾寺廟與地方發展之關係
1978	台湾大学	許雪姬	明清兩代国人对澎湖群島的認知及防戍
	台湾大学	林聖芬	清代台湾之團練制度
	台湾師大	温振華	清代台北盆地經濟社会的演变
1979	文化大学	周雪玉	施琅之研究
	文化大学	林淑玲	台湾地方性歴史博物館之研究
	台湾大学	洪美齡	清代台湾供輸福建米糧之研究
	台湾師大	吳文星	日坵時期台湾師範教育之研究
1980	台湾大学	何懿玲	日坵前漢人在蘭陽地区的開發
	台湾大学	張舜華	台湾官制中「道」的研究
	文化大学	何培夫	楊廷理台湾治績考
	台湾師大	蔡淵黎	清代台湾社会領導階層
	台湾師大	張正昌	林獻堂與台湾民族運動
1981	台湾大学	周婉窈	日治時代台湾議會設置請願運動析論
	東海大学	陳三郎	日坵時期台湾留日学生之研究
1982	台湾大学	藤井志津枝	一九八七至一八七四年台湾事件之研究
	台湾師大	劉妮玲	清代台湾民变研究

出典：李筱峰「近三十年來台湾地區大學歴史研究所中有關台湾史研究成果之分析」(注6)、85-87頁。

この27篇の台湾史研究の論文中、各校の篇数について見れば、台湾大学歴史系大学院の12篇が最も多く44.4%を占め、その次は文化大学の歴史系大学院の9篇で33.3%を占め、次いで台湾師大歴史系大学院の5篇、18.5%、次いで東海大学歴史系大学の1篇、3.7%であり、政治大学と輔仁大学は1篇もない(図1参照)<sup>9</sup>。研究対象の時期についてその篇数から言えば、清代18篇、66.7%を占め、その次は日本統治期5篇、18.5%を占め、清代以前と戦後はそれぞれ1篇、3.7%を占め、その他は2篇、7.4%を占める(図2参照)。研究テーマについて言えば、台湾史研究論文の27篇中、政治史(軍事・外交史を含む)が9篇で最も多く、33.3%を占め、その次は経済史

（開拓史を含む）で 8 篇、29.6%を占める、次いで社会史の 4 篇、14.8%を占め、制度史と教育史は各々 2 篇、7.4%を占め、人物史とその他は各々 1 篇、3.7%を占める<sup>10</sup>（図 3 参照）。

テーマごとの在在時代の分布状況（表 4 参照）を見ると、台湾史研究論文中、政治史は清代 7 篇、日本統治期 2 篇、経済史は清代以前 1 篇、清代 5 篇、日本統治期と戦後とは各 1 篇、社会史は清代 3 篇、その他 1 篇である。制度史は清代 2 篇、教育史は日本統治期 2 篇、人物史は清代 1 篇、その他 1 篇である<sup>11</sup>。

図 1：1982 年以前の台湾各大学歴史系大学院の台湾史関連修士論文の割合  
注：前掲李筱峰論文（注 6）、85-86 頁から作成。

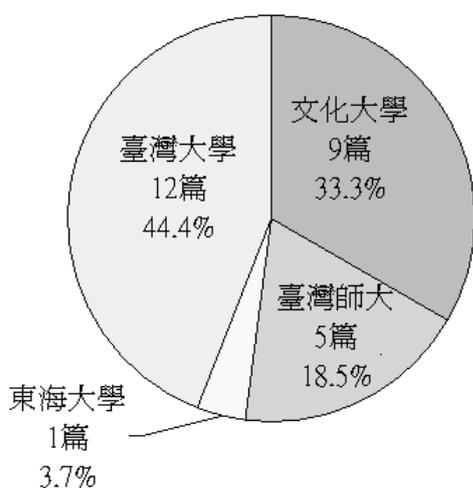


図 2：1982 年以前の台湾の台湾史関連修士論文研究の時代別の割合  
注：図 1 に同じ。

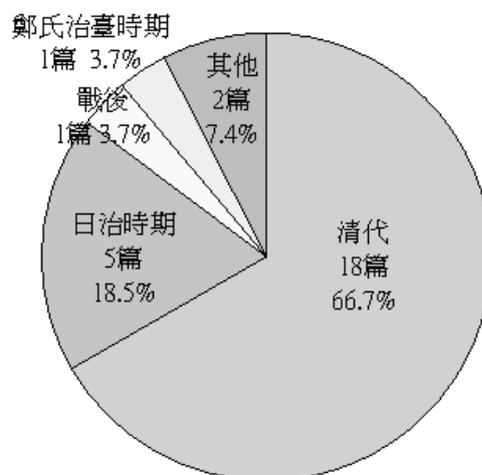


図 3：1982 年以前の台湾史関連修士論文研究テーマ別割合  
注：施志汶『台湾史研究的反思——以近十年來國內各校歷史研究所碩士論文為中心（1983-1992）』（注 7）、416-419 頁の資料から作成。

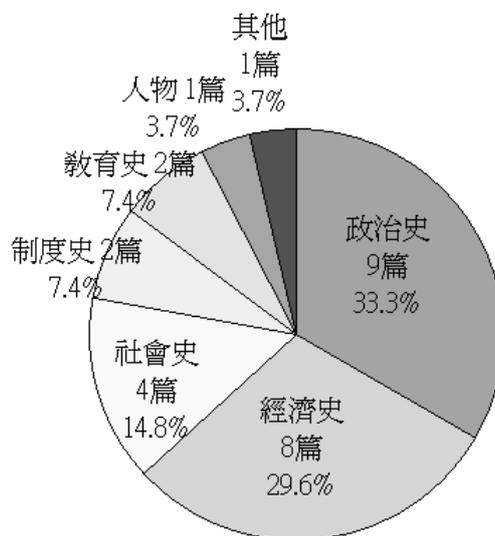


表 4：1982 年以前の台湾史関連修士論文テーマ別の各時代の分布状況

時代別	政治史	經濟史	社会史	制度史	教育史	人物	其他	合計
清代以前		1						1
清治時代	7	5	3	2		1		18
日治時期	2	1			2			5
戦後		1						1
其他			1				1	1
合計篇數	9	8	4	2	2	1	1	27

出典：表 3 と同じ。

総じて言えば 1982 年以前は、台湾の各大学の歴史系大学院の修士論文で台湾史をテーマとして執筆する者ははなはだ少かったが、ほぼ 40 年の間に青年学徒が台湾史に関心を持つようになっていることが見えるようになり、台湾史研究に従事する者は 1975 年以後、緩慢に増加していたことがわかる。

#### 第 4 節 最近二十年來の台湾史研究の概況

1980 年前後から台湾史研究は次第にブームとなり、論文が漸増した。1976 年から 1985 年までの 10 年間の台湾史研究の修士論文篇数は 31 篇<sup>12</sup>で、1946 年から 1975 年の 30 年間に比べて 20 篇多い。大まかに言えば 1980 年代以後、台湾史研究ブーム醸成のもと 1983 年から 1992 年の 10 年間、台湾各大学歴史系の大学院の修士論文の総数は 461 篇、その中で台湾史を研究テーマとするものは 73 篇、15.8%を占めるという数字から知ることができる<sup>13</sup> (表 5 参照)。

表 5 : 1983-1992 年の各大学の歴史学専修大学院の全修士論文中、台湾史関連修士論文の占める割合

年度	台湾史修士論文数	修士論文総数	百分比
1983	44	3	6.81%
1984	37	4	10.81%
1985	35	5	14.29%
1986	56	7	12.50%
1987	34	2	5.88%
1988	32	7	21.87%
1989	51	9	17.64%
1990	43	7	16.27%
1991	61	14	22.95%
1992	68	15	22.05%
合計	461	73	15.83%

出典：前掲施志汝論文（注 7）、434 頁。

1990 年代以後台湾史研究ブームは前の 10 年に比べてさらに盛んになり、隆盛とすら言えよう。具体的に言えば、1975 年から 1982 年までに、台湾では毎年少なくとも 2 篇は台湾史を研究テーマとする修士論文が発表され（前述のように）1983 年から 1992 年までは、毎年平均 7.3 篇の台湾史研究の修士論文が提出された。最近 10 年間では、台湾の各大学の歴史学専修大学院では台湾史研究をテーマとする修士論文は合計 340 篇あり、これをその前の 10 年の 73 篇と比べると、4.7 倍に増加しており、これを戦後から 1992 年までの 100 篇と比べると、その増加率はすなわち 3.4 倍である。台湾史研究論文の各大学歴史学専修大学院に提出された修士論文総数に占める割合について述べれば、1982 年までは 5.5%、1983 年から 1992 年までは 15.8%、1993 年から 2002 年は 32.7%<sup>14</sup>である。単一年度に提出された論文数からみると、戦後から 1965 年までの 20 年間は台湾史を研究テーマとする修士論文は 1 篇も提出されておらず<sup>15</sup>、1966 年と 1967 年になってようやく 2 篇と 1 篇の台湾史研究の修士論文が現れ、1971 年以後 1990 年までは毎年台湾史

研究論文は少なくとも1篇あり、多い時は9篇あり、1991年に至ると、一年に14篇の台湾史研究の修士論文が提出されるまでになり、1992年一年で15篇の台湾史研究の修士論文が提出された<sup>16</sup>。1997年以後は毎年平均台湾史研究の修士論文は35篇あり、2000年と2001年はさらに多く45篇となっている。これより台湾史研究がすでに台湾における歴史研究の主要領域の一つとなっていることが十分見てとれる<sup>17</sup>。1983年から1992年までの台湾史研究の修士論文は全部で73篇、各大学の台湾史研究論文がそれぞれの歴史学専修大学院に提出された修士論文の中で占める割合から見ると、成功大学の歴史学専修大学院に提出された論文数が最も多く、11篇57.9%を占め<sup>18</sup>、その次は東海大学歴史学専修大学院で、15篇23.1%、その次は文化大学歴史学専修大学院、14篇17.3%を占め、その次は台湾師大歴史学専修大学院、13篇15.3%を占め、その次は清華大学歴史学専修大学院、5篇15.2%を占め、その後は台湾大学歴史学専修大学院、9篇で9.2%を占め、最後は政治大学の歴史学専修大学院で、6篇7.5%<sup>19</sup>を占める（表6参照）。各時代の提出本数についてみれば、1993年の後の10年間、台湾史研究の修士論文は全部で1040篇、各大学の台湾史研究論文の各大学歴史学専修大学院に提出された修士論文の中に占める割合からみれば、中央大学歴史学専修大学院の修士論文全部で47篇の中で同校歴史学専修の修士論文の81%を占めるという割合が最高であり、その次は淡江大学台湾史研究論文の8篇で、同校歴史学専修大学院の修士論文の80%を占め、その次は成功大学の台湾史研究論文51篇で、同校歴史学専修大学院の修士論文の52.6%、その次は東海大学の台湾史研究論文31篇で、同校歴史学専修大学院の修士論文の41.9%を占め、またその次は暨南大学の台湾史研究論文8篇で、同校歴史学専修大学院の36.4%を占め、台湾師大・中興大学・中正大学・台湾大学・清華大学・政治大学・文化大学の7大学の台湾史研究論文はそれぞれ55篇、31篇、15篇、34篇、20篇、23篇と17篇で、それぞれの歴史学専修大学院の修士論文の36.2%、30.1%、28.8%、26.2%、23%、19.8%と12.2%を占める（表7参照）。表7からわかるように、成功大学と文化大学以外は、各大学の台湾史を研究テーマとする論文の割合はすべて1983年から1992年の間に大幅に上昇したが、成功大学歴史学専修大学院と文化大学の歴史学専修大学院ではその割合が5.3%と5.1%（表6と表7を参照）に下がっている。各大学の歴史学専修大学院に提出された台湾史関連修士論文の台湾史研究修士論文総数に占める歴史学専修大学院別の割合について言えば、その状況は表8のとおりである。

表6：1983-1992年の各大学台湾史関連修士論文における各大学歴史学専修大学院別修士論文の割合

校別	修士論文総数	台湾史修士論文	百分比%
台湾大学	99	9	9.18%
政治大学	80	6	7.50%
清華大学	33	5	15.15%
台湾師大	85	13	15.29%
成功大学	19	11	57.89%
東海大学	65	15	23.07%
文化大学	81	14	17.28%

出典：表5に同じ。

表 7 : 1993-2002 年の各大学歴史系大学院修士論文の中の台湾史関連修士論文の割合

校別	台湾史修士論文数	歴史系大学院修士論文数	割合順位	百分比%
中央大学	47	58	1	81.0%
淡江大学	8	10	2	80.0%
成功大学	51	97	3	52.6%
東海大学	31	74	4	41.9%
暨南大学	8	22	5	36.4%
台湾師大	55	152	6	36.2%
中興大学	31	103	7	30.1%
中正大学	15	52	8	28.8%
台湾大学	34	130	9	26.2%
清華大学	20	87	10	23.0%
政治大学	23	116	11	19.8%
文化大学	17	139	12	12.2%
合計	340	1040	---	100%

出典：施志汶「近十年歴史研究所台湾史碩士論文之考察（1993年-2002年）」（注13）、57-58頁。

表 8 : 1993-2002 年の歴史系大学院別の台湾史関連修士論文の割合

校別	台湾史修士論文数	百分比%
中央大学	47	13.8%
淡江大学	8	2.4%
成功大学	51	15.0%
東海大学	31	9.1%
暨南大学	8	2.4%
台湾師大	55	16.2%
中興大学	31	9.1%
中正大学	15	4.4%
台湾大学	34	10.0%
清華大学	20	5.9%
政治大学	23	6.8%
文化大学	17	5.0%
合計	340	100%

備註：1993-2002年全国各大学大学院台湾史研究修士論文の総数も340篇。

出典：表7に同じ。

次いでお話しすることは1983年から1992年までの各大学の歴史系大学院の台湾史研究修士論文時代別分布状況についてである。データの示すところでは、この10年間の台湾史研究修士論文は日本統治期を研究するものが最も多く、37%を占め、その次は清代で、34.2%を占め、その次は戦後で24.7%を占め、その次は鄭氏時期で4%を占める<sup>20</sup>。1993年から2002年までの各大学の歴史系大学院に提出された台湾史研究の修士論文の各時代的分布情形はその前の10年と比べると大幅な変化がある。この10年間の各大学の歴史学専修大学院に提出された台湾史研究の修士論文は戦後研究が最も多く36.5%を占め、その次は日本統治期で27.9%を占め、その次は清代で21.2%を占め、その次は通代で8.8%を占め、二つの時期に跨るものは5.6%を占めている<sup>21</sup>。いま1983年から1992年までの73篇の台湾史研究修士論文の研究テーマを述べると、データで

は、各大学歴史学専修大学院の台湾史研究修士論文中、文教・経済研究が各 18 篇、24.7%を占め、社会研究は 15 篇、20.5%を占め、政治研究 10 篇、13.7%を占め、人物研究は 5 篇、6.8%を占め、科学と医学研究は 4 篇、5.5%を占め、研究制度は 2 篇、2.7%を占め、その他 1 篇、1.4%を占める<sup>22</sup>。（図 4 参照）

最後に 1993 年から 2002 年の 340 篇の台湾研究の修士論文中、研究テーマごとの割合について述べれば、分類統計の結果は図 5 の通りである。

図 4：1983-1992 年各大学歴史学専修大学院提出の台湾史修士論文の研究テーマ別割合

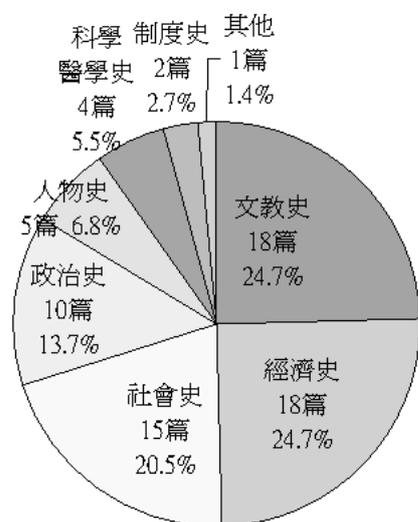
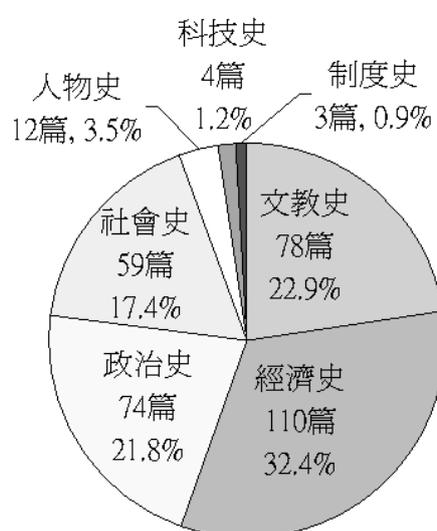


図 5：1993-2002 年に各大学歴史系大学院に提出された台湾史修士論文の研究テーマ別割合

注：本図は施志汶「近十年歴史研究所台湾史碩士論文之考察——1993 年至 2002 年」による。



上図からわかる最近の 10 年の台湾史研究の修士論文の研究テーマごとの分類によれば、経済史が 32.4%を占め最も多く、その次は文化・教育が 22.9%を占め、その次は政治が 21.8%を占め、その次は社会が 17.4%を占め、人物・科学技術・制度がそれぞれ 3.5%、1.2%、0.9%を占めている。上述のデータより、台湾史研究において重視される研究テーマはその前の 10 年間に既に変化し、即ちこの 10 年来の研究は経済が最も多く、その次は文化・教育で、その次は政治、その次は社会であり、この傾向は 1983 年から 1992 年までの 10 年間とは異なることがわかる。

## 結語

これまでに検討したように、台湾の戦後 40 年間あまり、各大学の歴史学科の課程構成は長期間、中国史、西洋史（または世界史）が主で、台湾史は基本的には中国史の単なる一部に過ぎなかった。しかし戦後 40 年間あまりの台湾における政治的社会的変化によって、1980 年代以後台湾における歴史研究は中国史研究によって独占されていた局面を次第に突破し、台湾の各大学の歴史学科では

台湾史関係のカリキュラムが次第に開講され学生に選択科目を提供した。1990年代後半以後、台湾通史は各大学の歴史学科の必修科目となり、歴史学専修の大学院もまた1980年代になってようやく台湾史研究などの専修コースの科目が現れた。

台湾史課程の開設状況によって台湾史研究の発展傾向を理解し、さらに歴史学専修課程大学院の台湾史研究修士論文の篇数の増減とテーマ別の変化によって台湾史研究の過去と現在の状況を認識した。修士論文の篇数とテーマに検討を加えたところ、戦後20年間(1945-1965)、台湾では台湾史を研究テーマとする修士論文は一篇も発表されず、1966年になってようやく発表された。1945年から1982年の約40年間に、全台湾でわずかに27篇の台湾史研究の修士論文しかなく、各大学の歴史学専修課程大学院の修士論文総数の5.5%だった。1983年から1992年の10年間の台湾史研究の修士論文は全部で73篇、各大学歴史学専修課程大学院修士論文総数の15.8%を占めた。1993年から2002年の10年間の台湾史研究の修士論文数は大幅に増加し340篇にのぼり、各大学の歴史学専修課程大学院の修士論文総数の32.7%を占めた。台湾史研究の修士論文のテーマでは、戦後約40年間は清代の政治史関係が最も多かった。1982年から1992年までの10年間は日本統治期の研究が最も多く、この10年間で言えば、文化・教育研究と経済研究の数が拮抗していた。1993年から2002年までの10年間は戦後史研究が最も多く、研究テーマ別では、経済史が最も多い。以上は戦後台湾において発表された台湾史研究について個人的に論述した文章に基づき整理しまとめた結果であり、ここに皆様の参考に供し、皆様方にご教示をお願いする次第である。

## 注

- 1 彭明輝「台湾地區歴史學期刊論文與博・碩士論文的量化比較、1945-2000」『漢學研究通訊』第21卷2期、2002年5月、2頁。
- 2 吳文星「近五十年來台灣關於日治時期教育史研究之動向」『台湾史研究』第8卷第1期、2001年6月、164-165頁。
- 3 吳文星・張勝彦・鄭粹『「台湾史課程規劃研究成果報告」教育部大專院校人文社會科學教育改進計劃、1996年6月、7-8頁(未正式出版)。
- 4 吳文星前掲「近五十年來台灣關於日治時期教育史研究之動向」、165-166頁。
- 5 同上、166頁。
- 6 李筱峰「近三十年來台灣地區大學歷史研究所中有關台灣史研究成果之分析」『台灣風物』第34卷第2期、1984年6月、85頁。
- 7 施志汶『「台湾史研究的反思」——以近十年來國內各校歷史研究所碩士論文為中心(1983-1992)」』『國立台灣師範大學歷史學報』第22期、1994年6月、416頁。
- 8 李筱峰前掲論文、85-86頁。
- 9 同上。
- 10 注7に同じ。
- 11 施志汶1994年論文(注7)、416-419頁。
- 12 吳文星前掲「近五十年來台灣關於日治時期教育史研究之動向」、169頁。
- 13 1993-2002年の台湾各大学歴史系大学院の修士論文総数は1040篇である。施志汶「近十年歴史研究所台湾史碩士論文之考察(1993年-2002年)」『台湾史料研究』、2003年9月、58頁を参照。
- 14 同上注、54頁、および施志汶1994年論文(注7)の416・426頁を参照。
- 15 李筱峰前掲論文、85-87頁および89頁。
- 16 表5参照。

- 
- 17 施志汶 2003 年論文（注 13）、54-55 頁参照。
  - 18 成功大学は 1985 年に歴史系大学院を設立、台湾史研究を重点化したので、台湾史を研究題目とする修士論文は多く、そのため台湾史研究論文の占める割合が、他校より多い。
  - 19 施志汶 1994 年論文（注 7）、436 頁。
  - 20 同上、439 頁。
  - 21 施志汶 2003 年論文（注 13）、58 頁。
  - 22 1983-1992 年の各大学歴史系大学院の 73 篇の台湾史研究の修士論文を分類統計に加えた結果。施志汶 1994 年論文（注 7）、427-433 頁を参照。